

青島は、日南海岸ではあまりにも有名なだけに、今さ

ら書く要もあるまい。右左神武神社の宮々とかかわりの

おまじりおまじり(伊勢神宮) | 天恩徳取命 | 瓊杵作命

(可愛山陵) | 彦火火出見命(青島神社) | 鷲遊草草不

命(鷲戸神宮) | 神武天皇(宮崎神宮)、つまり神武

天皇の祖父神、彦火々出見命が祭神なのである。

神社の由緒には、命が海邊宮からお遷幸の際の御宮居

の跡として、命豊玉姫命、塩筒筒命をまつたと、平安

朝の頃「日向土産」に記述されているという。

この塩筒筒命は「塩土翁」が、彦火火出見命と目無籠

(目のない籠)水へ入らない籠の意か)に、齒染の葉を敷いて

龍宮に送ったという古伝から、齒染の浮島ともいわれ、

また海幸、山幸の伝説もある。

砂岩と泥板岩との互層が、長い長い海食によつて鬼の

洗濯石となり、島の四周を囲んでいる。そして島全体が

びるりの自然林と数多くの熱帯植物におおわれている。

浜から望む南の果ての水手線から、私たちが先祖は海

洋族として渡来したにちがいないと、そんな想念が浮かぶ

島である。

神々にいのることばの多くして誠ひとつを

誓うていたり

風紋や青島の浜に春日暮る

異国めく日向青島 青あらし

(余白)

(獨集子)

文字通りの研修の旅、第一日青島では陽が落ちて、

浜風が冷たい。ふと浜辺に大野伴睦の句碑があるのに

気がついた。立ちよつて見ると次の句が書かれている。

異国めく日向青島 青あらし

報告

水浦鉦山部落の墨つけ祭

去る二月二十三日、宇目町の奥水浦鉦山の部落で、



木杵

ある熊野権現の祭で、旧正月の十一日に行われ

正月休みが終り、初仕事にかかると山あがりへの神事だ

そうである。(広報うめまて二月号による)

常に危険がともなう鉦山のへた者が、火の神(家の神)

を鍋ずみられたとえ、これを額につけることによつて、す

べその災いから身を守り、鉦山の繁栄を願うのである。

着いた時には公民館の前には、高さメートルほどの大幣が二基立

て、中には県紀事代理が来ていて、ふるさと大分振興事業で送られ、

頭蓋式が行われていた。特異な民俗風習としての趣意である。

生大根の切口は鍋ずみを、てんでに相手かまわずぬり

つける珍らしい賑わいで、若い人達に押し立てられた二

基の大幣の進行、笛大鼓のほやして進行するにつれて、

賑やかな最高潮となる。中老の人は娘さんを後ろからか

えるようにして鍋ずみをつける。するともういくつも鍋

が及べつけられていて、婦人会の連中が、まわりから取り

囲んでぬたくる。たちまちその男は額中が真っ黒になる。

喊声があつた。あまり逃げようともせず、つけら

れるものをつけるものも、喊声をあげての賑やかさであ

る。

私は同行の清田氏と一しょにエメリー礫石の砕石場を見て廢坑

の前を廻り、消え残りの雪道を登つて、天狗干山のズリ道を少し下

つて、山神社(山ん神さま)に参拝した。そして江戸時代から明治にか

けて盛んに採掘されてきた錫鉦山を想い見た。

部落からは岩戸神楽のほやしかにきこかに聞こえてくる。

帰りには大分探訪歩こう会のバスの幸便をいただいた。